

青年の環 1

華やかな色彩 野間 宏



青年の環 1

華やかな色彩 野間 宏

河出書房新社

青年せいねんの環わ1——華やかな色彩

初版発行昭和四十一年一月十四日 改裝初版発行昭和四十六年一月二十日

普及版初版発行昭和四十八年五月 十日

六版発行昭和五十二年三月二十五日

著者——野間宏 ©1966

装幀者——麻生三郎 題字——原弘

発行者——佐藤皓三

発行所——河出書房新社

東京都新宿区住吉町九五 郵便番号一六二

電話東京三五・五三一 振替東京〇一〇八〇二

印刷——多田印刷 製本——小泉製本

定価は帯を御覧下さい

目

次

第一部

第一章

華やかな色彩

炎に追われて

ハ
元

第二章

煤煙

無頼

盛り場の店

現実嫌

化粧

家の中

ぢ
元
九
二〇
三
元
元

第二部

第一章

美しい夜の魂……………一六四

投網……………一九六

邪教徒……………二六

第二章

跛行(一)……………二四六

跛行(二)——夢幻の人々……………二六九

徴兵忌避……………二九七

血とつながり……………三〇六

第三章

皮の街……………三三一

歴史の臭気……………三四五

市民館……………三七二

親と子……………三七五

華やかな色彩

〈青年の環〉第一・二部

第一部

第一章

華やかな色彩

一

場内は明るく粧よそぎわれた人々の顔で満たされていた。黒塗りの少し出張った円形のオーケストラボックスの後ろに、肩から腰にかけて布をまとい、円く口を開いた壺を細い両手にささげたアッシリア人の群像を薄茶の横糸で浮き出させた薄緑の緞帳ドレープが柔らかくたれている。この緞帳のかくしている舞台を中心に奥行の長い扇形に後方の開いた場内は、人々の黄や赤や薄紫や白の色とりどりの着物の模様と、いくらか期待の現れた様々の男女の顔を並べて、こうした場所特有の低い話し声や笑い声や、四囲の壁につきあたって戻ってくるので一層舞い上るように思える華やかなざわめきで満ちている。中央部の高い頂きから静かな円い勾配が周囲へおりている柔らかな卵色の天井が、天井と周囲の壁とが交わる隅々から煙るような明りを辺りにもらし匂におわせている。そのほの明るい天井の下で観客のなかに時に動く白い扇子が場内の光りを受け

てひらひらと輝き、女達の厚い化粧の顔の上にゆれ動く小さな影を落して、ひらめくような斑点となって翻えるとき、場内は一瞬美しい色紙を空から舞いちらせ、それが観客席の辺りで急にびたりと止まったというような錯覚を起させる。

周囲の開け放たれたドアが、ボタン、ボタンと閉ざされ、幕間を屋上へ涼みに出たり、便所へ立ったり、或いは喫茶室のテーブルをかこんで、むしろそれが目的で社交に費やしていた人々が各自の席に戻って来た。それらの足音で開幕を待つ人々の気持は急に乱され、突然声高になった話し声がひとしきり場内の端から端へ送られるように拡がって行くと、やがて又はたとやみ、観客達の開幕のベルを待つ心組みが場内に満ち渡り高まってくる。と、その幾分期待に充ちた人々の気持をゆるすように、じっと沈んだ地をほうようなベルの音が舞台の右下のあたりから聞えてきた。そして場内の空気がもう一度ざわと一掃はらぎすると、この大広間一杯に満ちていた柔らかな照明の光りは、四囲の広い明るい壁の地に吸い込まれるようにうすれて行つて、次第に真上の天井の色をばかし、人々の生きた顔や肌の形をかすませ、やがてそれらの形を色のうすれ行く影ばかりとし、場内は人工的につくられた夕暮れのように全く暗くなつて行つた。そして場内に残っている光りといつては、舞台の左前に置かれた演願告知の硝子箱から輝き出る淡いガス燈のような明りと、舞台の右横の壁にはめ込まれた円い夜光時計の文字盤と八時四十五分を指している二本の針の、螢火を灯したような緑色の明りだけになつてしまつた。

後ろの中央のドアの片隅が小さく開き、矢花正行が半ば開いた戸の隙間から音をたてぬようにと気を配りながらはいって来た。外の廊下の明るみから急に暗い場内にはいつて来て視力を奪われ、彼はしばらく、そのままドアの処につつ立っていたが、もしこの時一条の明りが闇の中にさして彼の顔を浮かび上らせたとすれば、人々は彼の長形の顔の上に鮮やかに印された苦しげな冷笑を認めることが出来たであろう。そして、さらにその光りが、彼の心の底まで突き入って照らし出すことが出来たとすれば、彼がここへ来る道々、かなり長い間、今夜の舞踊会に出演するはずの一人の踊り手に対する彼の欲望に烈しく抵抗しながらも、ついに彼の意志がこの欲望の強さに破れ去った、みじめな闘いの名残り、いまもなお彼の脳壁にびったり付いている一人の女の肢体や、彼の嗅覚を揺り動かそうとする或る特別な女の器官の匂いや、彼女に對する憎しみや恐れや怒りなどの交りあった心のけいれんを、そこにはっきり描き出したことであろう。

矢花正行は暗い場内に眼をならすため、ゆるやかな丘のように前方へ下っている場内の、ずっと前方の自分の座席にあたるはずの招待席の辺りに眼をやっていたが、次第に辺りにほの明りがさすように人々の頭や後ろ姿や椅子の列が形をあらわし、それらの向う、舞台の左側の演題告知箱の中に「白昼 大道陽子」という演題が輝いているのを見たとき、「とうとう来てしまった」という低いつぶやきが彼の口の上で来た。そして、それとともに彼は、恐れている宗教上の戒律や禁制を破ってしまったとき人々がよく感じるようなあの一

種特別な落ちつきを感じたのである。彼は自分の心に抗ってわざとゆっくりと椅子席の間を下って行き、あいている自分の席に人々に許しを乞いながら腰を下ろし、むしろ落ちつき返ったような氣持で眼を前方の舞台にそそいだ。

「じゃーん」という急激な銅鑼の一撃が鳴って、どこからともなく差し込む照明燈の白い光りが、観客の頭上を斜めに切り、音もなく幕が上げられる。と、舞台の奥には降ってくる光りの中に濃いすきとおるような青い海が霞むように拡がっており、右手の白日の光りに輝く、堆い砂丘の遙か向うにつづく砂浜が、焼けるような熱を湛えて舞台の手前までのびている。そして、その砂丘のゆるやかな傾斜が水打際に落ち込むあたり、熱い太陽の光りを存分にあびて一人の女の媚めかしう日に焦げた体が純白の布につつまれ寝転んでいる。左足を砂上にのばし右足を左足ひざにそってつま立て、この踊り手は純白の小さいダンス靴をびたりつけた爪先を伸ばし切っている。立てた脚の下部のところで短かいスカートの裾が乱れ開く。すると、遠くの海と同色の青いパンツにつつまれた柔らかない腰部がそこに咲き出る。肉の匂い、欲望のただよい。この女の体、というよりも腿のあたりで急に肉欲的に太くなっている裸の右足は冷たい光りを溢れるほどにも受けて、滑らかな、油を輝かせているような皮膚をきらめかせる。巧みに力を抜いて砂の上に無造作に投げ出されている両腕。この力を軽やかに保持している筋肉の緩やかな有様。

強い浪の打ち寄せる響きが、ピアノの中から聞えてきた。そしていま、まさに太陽の讃歌が一つの女の肉体を借りて舞

台の上に表現されようとする。……と急にピアノの音が高い鋭い痛むような響きをつたえたと思うと、寝転んで立てられていた女の右足の爪先がさっと体に直角に上げられ、つづいて、のばされている左足をこえて砂の上につま立てられる。

すると反動のある上体が軽い飛躍を抱いてはね上がり、今度はただ波の音をくりかえして行く音楽ののって繰り出すような両手が、五本の指をひろげて大きな掌を海の方に向けたまま遠くの青い海の無限の拡がりの方に向かってさし出される。

青い海の無限に向かって幾回となく呼びかける掌、そして女は舞台の左奥に進み寄って行く。人間の情熱の極度の昂まりがしばしそこで喘いでいるように、ピアノの音はとおい途切れ途切れの旋回を響かせ、青い海の無限の手前とまどっているように、女のさし出された二本の手が伸びようとして伸びきらぬ所作をつづけている。と、太い地を匍うような大地の轟きにも似た響きの中を、女の体が如何にしても到達することの出来ない海の無限に冷酷につき放されて、同じ振付けをくりかえしながら後退して来て、燃えている砂丘——大地にしっかりと捉えられる。いま再び女は大地のものだ。砂の上に体を投げ、左足にささえられて高くあげた右足。そして、この「太陽の光りを存分に受容する生命」の美しいポーズが、帯状にさし込む照明の明りの中に、くっきり浮かんでいる。

矢花正行にとっては、これらの大道陽子の姿態は、彼の肉体に対する一つの烈しい不意打ちであったと言えた。幕があげられ、照明燈の光りが造り出す明るい海の底のような、一種現実界をかけたなれた舞踊のアトモスフェアが舞台の上に

形成されて行つたとき、正行は固い椅子に背を押したまま、向うに展げた舞台の上の一人の女の半裸の姿にじっと眼をそそいでいたが、彼は次第に自分の眼がその寝そべっている女の裸身に吸いよせられるのを感じた。しかし、それはまだ冷やかな光りを浴びて横たわっている一人の踊り手の裸身にすぎなかった。と突然、彼は自分の視界の中に異様な性的の牽引力の動くのを感じた。すると眼の前の寝転んでいる踊り手のつくり上げている華やかな芸術的形像が見る見る乱れて、この踊り手の姿の下から、大道陽子の生身の姿が現れてきた。……その踊り手の足、踊り手ではなくて、まさに陽子のその足を彼は知っている。それは彼のみが知る、大道陽子の現身である。ああ、この足、この体。このあつい熱。砂浜に寝転ぶ陽子の熱い体が彼の両の眼をあつく焼く。彼はじっと大きく眼を開いて舞台の上の彼女の姿を追うていた。彼の臉の筋肉はふるえ、彼の眼は大きく開いた上にさらに開いた。彼の体はこまかくおののき、毛孔に血がみち、彼は情欲が体内に充ち渡って行く熱い苦しい充実感が、体のすみずみまで拡がって行くのを感じた。そしてついに彼は、自分の体内の欲望の昂まり行く烈しい響きが、この薄暗い場内一ぱいに伝わり拡がるような戦きを感じた。以前、彼女のこの肉が彼の肉の上に印した消えがたい快樂の跡形が、灰色の歯を並べて降るどしゃ降りの雨の中を引き裂いて落ちる落雷の赤い火箭が暗い宇宙を振動させるように、彼の肉体のもっとも深い暗闇の中で、生き返り、新たに爆裂するのを彼は感じた。しかし彼はすぐに自分の内に強い意志力を呼び集めて自分自

身を制禦した。そして自分の体内を駈け去る情欲の烈しい戦きに抗いながら、舞台の上の踊り手の展げる舞踊の姿を追うて行った。

情欲に対抗する精神の強力な作業が彼の心の内に起ってき。彼は自分の冷厳な精神の眼が自分の情欲の蠢きを冷やかに見つめているのを感じていた。そしてその冷たい眼が、同時に舞台の上の陽子の踊りの形や姿や色や、そして、その足と手と首と腰の使いわける舞踊のテクニクを、何一つ見逃すまいとして眺めているのを感じていた。そしてその眼は、もしその踊りの手法に少しの誤謬があらわれようと、容赦なくそれを摘発し、取りおさえ、彼女の前につきつけようと心組んでいるようであった。

舞台の上の女の体は、軽やかな輪舞に移っている。大地に埋れるように寝転んでいた体が立ち上って来ると、舞台の上に撒かれていた黄金の小さい紙片を、砂粒をつけるように太り気味の手首や円い肩や背や太腿や長く後ろに垂らした断髪の髪に付けて、それが照明の光りに当ってきらきら輝き、彼女が軽やかに体を旋回させて舞台の上を廻って行くことに、体から離れ落ちてきらめきながら消えて行く。女はいま大地の自由になっている。旋回しながら軽やかに両腕で交互に空を切るようにして舞い、優美なスライドと敏速なカットを交えた進行が再び旋回に返って行く。そして女の体は再び大地の上に投げ出され、ここで大地の営みの表現に移って行く。輝く太陽の下の大地の喜びとか、喜びというには少し無表情すぎる、幾分单调な、大地の太古より変ることのない永

遠の営みの形姿が、砂の上をゆるやかに転がり行く女の体の上にあらわれはじめた。

矢花正行は依然として舞台の上の女の肉体を眼で追いながら、かつての恋愛の対象者の体を、しかも裸に近い体を、こうして何千と取りかこむ観客の眼の中の二個の眼として眺めている自分の不思議な位置のことを、ちらと頭の端で考えていた。新しい美しい舞踊の形をつくり、つくられたと思うと直ちに消え去り、つづいて次の形に移って行く踊りの形象を、強力な精神の支えを呼びながら追跡しつつ彼は自分の頭脳の奥深くちらちらと甦えり展開してくる彼の過去、彼の不幸な過去、陽子の肉体に関する彼の不幸な過去が、非常な速度でかすめ通るのを見守っていた。「この体、これが俺の何よりも求めているものなのだ。」彼は彼の体が彼に向かってこう叫ぶのを聞いた。「いかに、俺の心が、この肉体を無視し、軽蔑し、すでにこの肉体から絶縁したと宣言しようとも、それは偽りであり、誤魔化しにすぎないのだ。」彼の体は、この前の女の体を知っている。この砂の上をゆるやかに転がって行く女の体を、はっきりと、彼の参加している一つの過去の場面の内にある姿として知っている。彼は彼の熱く燃えている体の底をくぐるようにして、彼の右手の指先から伝い上ってくる一つのなめらかな肉の感覚を、ちらと再び頭の中で振り返る自分を感じた。彼は過去の快樂がいま再び自分の身内を慄わせるのを憎々しげにながめた。自分の意志の自由にならない自分の肉体の感覚と肉体の神経の存在が彼を苦しめる。しかし次の瞬間、彼は、この女の肉体が既にいまは全く彼の

手から離れて彼からとおく去ってしまったことをはつきり思い起した。

確かにこの女の肉体は、明らかに彼の肉体に対して快楽のはげしい反応を返してよこしたことがある。それは、ほんの一時のことであつたにしろ、この肉体は、たしかな手応えを彼の肉体に示したことがあるのである。しかし、いま舞台の上で両足と両手をもつて上向けの体を支え、白い太陽の光りを浴びて大地の永遠に繰り返される営みを表現しようとしてゐるこの女の肉体は、もはや現在の彼には如何に努力しようとも近づくことの許されない存在である。それは既にずっと以前、彼の掌の中からすべり去ってしまったのである。彼はかつて彼を近づけたこの肉体が、ついには憎しみに燃えながら彼の肉体をむごくしりぞけたことを思い起した。もはや、この体は彼のものではない、それは全く彼の意志から独立した意志をもっている一つの別個の存在にすぎない。この肉体の中には、いまでも彼に対する憎しみが封じこめられているに違いないのである。そして彼は、彼女が彼に寄こした最後の手紙の言葉が、まるで昨日きた手紙の言葉でもあるかのように生々々としてくると、舞台の上からおどろくようにして彼の頭に浮かんでくるのを感じた。『どうおっしゃろうと、あたし、もう、あなたを愛することはできないと思います。あたし、幾度も、あなたを愛しようと思つてはみました。自分を愛情の裏切者などにはしたくないので、苦しみましたの。でも、自分の感情をどうすることもできないということには認めて頂きたいと思ひます。あなたにはほんとうにお気の毒だ

とは思いますが……でも、それは致し方ないことと思ひます。』しかし、一年間もほとんど手紙のやりとりもせず、全く關係を絶つていた彼女が、どうして自分を今日の舞踏会に招待したりしたのだろうか……或いは彼女は再び彼を元の關係に引き戻そうというのだろうか。そんなことはあり得ることではない。彼の前に彼女の肉体をつきつけ、彼がいまなお彼女の肉体におびき寄せられることを確かめることによって、勝利の快感に酔おうというのだろうか。

矢花正行は自分の脳裏を過ぎる、意識の急速な展開をおしとどめた。そして再び舞台にそそいでいる視力に力を加えた。舞台の上の女は、静かに腰をもたげ、頭を逆さまにそらせて両手と両足先で上向きの体を支えた。そして、ゆるやかにその身を前後に揺すっている。と、女の体の全重量が上半身に集まつてきて、女は自分の両手を下敷きにするような恰好のまま砂の上に体を投げ出して行く。太陽の光りに酔う大地の陶酔の表現が形づくられて行くのである。女は下向きに倒して力の抜けて長く伸びた体をかすかにちぢめる。と、やがてだらりと前の砂の上にたれた頸が廻り、断髪の髪の毛がかぶさっている顔を徐々に左に向け、眼をふさぎ、恍惚の状態の表情をつけたその顔が、観客席の方を向いたまま、じっと動かなくなる。正行は、膝の前で組んでいる両手の掌に汗と脂がにじみ出ているのを感じた。そして、その女の顔をじっと見つめた。

紺青の海の掬がりを背景に、うちつづく砂浜に体をうつぶせにして埋め、砂の間から顔を出して、あるかなしきの微笑

を、閉ざした堆い臉のあたりに浮かべて、満ち足りた大地の喜びの表情を観客席に向かつてさし出そうとしている女の姿。海から吹きつける熱をふくんだ風が後ろの髪の毛を越えて、この顔を光りに濡れているように輝かす。太く長く先を急に細く細く細めて引いている眉、その下で閉ざされている二つの広い眼。しっかりと固い肉付きをもって高まり、尖の形が僅かにくずれて開き気味になっている鼻、濃い白粉と紅を流した頬がゆるやかな傾斜をつくって小さい顎に走っている。正行がすでに一年以上も見ることのなかったこの恋人の顔は、踊りのメーキャップを施されて、彼には、全く別人の顔のように見える。この顔は、以前、彼の顔の真近くで、小さく慄え、おののき、その薄褐色の睫毛の細く外側に開き出た眼の端のほの赤い肉を、彼の眼に見とどけさせたあの顔ではない。この顔の形は彼女のその顔の形と同じ形でありながら、何か薄い透明な膜でつくられた仮面をかぶって、その下にある彼女の真実の顔を蔽いかくしてしまっているかのように思える。この顔はまた、以前彼から僅か二三歩の距離のところにあつて、憎しみをつつみかくしている冷やかな見下げるような眼差しをもつて彼の心をしりぞけ、彼の燃えたつ心に冷水を浴びせかけたときの彼女の顔でもない。あの彼女の日常の顔ではない。かつては彼が愛し、また彼を愛し、そして今では彼が憎み、また彼を憎んでいる大道陽子の所有している顔ではない。この顔は彼に対する特別な何らの関係をもつてはいない。これはただ、この場内の何干という観衆のための顔であり、踊りのための顔であり、舞台の上の顔である。正

行はその彼女の顔に眼を向けながら、この劇場内のこの招待席に腰かけている彼の存在を、ただ一人の観客として取り扱うその顔に、何かもどかしい苦しみを感じていた。

幅のある銅鑼の一撃が鳴り、高い青空から日の光りが降ってきた。と、開幕の場面と同じく強い浪の打ち寄せる響きがピアノの中から聞えてきた。そして踊り手の体が急に砂の上で回転して上向きになると、右足をつま立て、横たえた左手が手の甲をそらせて羞恥の表情をつけ、太陽の光りを存分に受容するポーズが完了し、踊りはこの舞踊のライトモチーフである、青い海の無限に向かつて肉体を繰りかえし繰りかえしさし出しながら、ついにそこに到達することが出来ず、哀れにもつき返されてかえってくる肉体の喘ぎの表現にもどってきた。体内の情熱の泡立つ上昇と、その情熱が無限の向うまで拡がろうとして喘ぎつづける姿が女の繰り出されていく両手によって形づくられる。女は限りなく拡がる海の水平線に幾回となく呼びかけ呼びかけ、舞台の左奥に進み寄って行く、ついに青い海は女の心を誘いながら冷酷につきはなし、女は砂丘の上によりやく後退して来て大地の上のしっかと捉えられる。そして女は再び大地の上に帰って来て生氣を取りかえず。女には大地のほか生命を生かす場所はないのである。右足をつま立て、左手の先を少しく羞恥のためにふるわせて太陽の光りをむきぶり受ける美しいポーズが照明の中に浮かんでくる。舞台は一瞬、閉幕の前の深い沈黙にとどまれ、静かに規則正しく打ち返す波の音、高い天の降らすきらめき。すると幕が降りた。と、場内に溢れるような拍手が起

ってきた。舞台の奥の青い海が徐々に幕の後ろに隠れて行く、砂丘のゆるやかな傾斜に横たわって上に挙げている女の右の足が視界から消える、さんさんと降る太陽の光りが観客の眼から遮られる。そしてついに長い房をつけた広い綾帳が「白昼」の明るい舞台を閉ざしてしまった。……再び拍手の大きな波が観客席に鳴り渡ってきた。幕がすでに降りて、いまだ舞台の上にいるに違いない陽子に向けられた人々の拍手に、なぜか本能的に抵抗しながら、正行は膝の上の両手を固く組み合わせ、後ろの椅子に背をきつくおしつけ、靴の底に床のコンクリートの固さを感じて、じっと坐っていた。『俺は拍手しないぞ、俺には拍手は出来ないぞ。』と彼はそのまま体を固くした姿勢でちらと考えた。幕が降りて一瞬暗くなった彼の眼界の中には、眼球の奥の網膜に焼きつけられた陽子の閉幕前のポーズが光りを放つもののように残っている。彼は急に両眼に力を入れて固くとざした。そして眼の中の、陽子の映像をふるい落した。『しかし俺がこの踊りに拍手を送らないというのは、何も彼女に対する憎しみによるのだなどということではない。ただ俺には、この踊りが踊りとしてほんとうにいいものかどうか疑わしいからにすぎない。』眼を開いて彼は思った。しかし彼は彼の脳裏をかすめ通るこうした言葉の後に、すでに自分自身の心を烈しく痛ませるものがあるのに気づいていた。

観客席の後ろや左右両側のドアの開け放たれる重い物音が拍手の静まるとともに聞えてきた。そして矢花正行の血の昇った頭の中で拡がる拍手の音がうすれて行った。彼の頭の深

い奥のところで幾千という白い紙片をちらしつづけているように響いている拍手の音をくぐるようにして一人の女の顔が通りすぎる。一人の晴れやかな表情をした額の大きい頬骨の少しつき出た女の顔、その顔がいくらか暗い哀しみの影を顔の上にちらつかせながら、正行の意識の中をくぐりぬける。その顔が彼の心を痛ませる。

高い天井の周囲の壁がほんのりした光りを吐きはじめ、朝の光りに似てそれよりもさらに暗く柔らかい光りが幾重にも四囲の高い壁の上で交叉し、明りが漸次上の方から場内に降りてくると、やがて辺りは全く幕間の明るみをとおり、人々の背や肩や髪や椅子の形が、はっきりとそれぞれの位置を占めはじめた。そして全く明るくなった明りの中で、矢花正行は自分の精神が何かに眼に見えない手で縛りつけられているような、奇妙な状態に陥っているのを感じた。彼は自分の体内を焼くようにして通り抜けて行った陽子の肉体の作用の跡形が、いまなお彼の体の真中を、はしからはしまで太く真直ぐに貫くように残っているのを感じた。

人々のざわめきが起ってきた。椅子座席をはね上げる響きが方々ではじめた。場内の空気はようやくむっとしてきたし、ワイシャツが汗にぬれて肌に付着している不快な感じが彼を捉えていたが、彼はしばらく動きもならず、椅子のまたれに身をよせたまま、じっと体をしずめていた。彼はまわりの人々が立ち上り左右の通りに出て出口の方へ列をつくるのを見たが、その列に加わりはしなかった。彼はたちまち出来た一つ一つの列が少しずつちぢまり、やがてついにどの列も